

学校評価書

総社市立山手小学校
校長 中司 康彦
(公 印 省 略)

1 自己評価

Ⅰ 評価結果 (別紙参照)

Ⅱ 分析・改善方策

1 心プロジェクト

(1) 心豊かな児童の育成

品格教育と関連づけた「特別の教科道德」の授業、月目標・週目標の遵守や振り返りを大切に生徒指導の取組、「よいこと見つけ」の取組などを行った。また、いじめを考える習慣や人権週間に合わせて、人権標語、「きらりカード」、「なかよしの虹」等の取組、人権に関する内容の道德の授業等を実施した。そして、11月から12月にかけて「言われて気持ちのよい言葉」や、「言われて嫌な気持ちになる言葉」を考える学級活動をすべてのクラスで行った。

アンケートでは「思いやりの心が育っている」についての保護者回答が、昨年度と同様、肯定的意見の割合が非常に高く、昨年度の割合よりさらに高くなった。これは、日頃使っている言葉を見直す学級活動や人権に関する取組、ピア・サポートの取組が児童に充実感を生み、児童の変容につながったことも理由の一つと考えられる。今後も継続して取り組んでいく。また、「友達から優しくされている」の児童の肯定的意見の割合は昨年度と比べ19%高くなった。これは、アンケートの問い方を変え分かりやすくしたことや、学校での取組や日々の学級経営等の成果だと考えられる。しかし、人権に関するアンケートでの保護者の肯定的回答の割合が昨年度より5%低くなり、「分からない」と回答した保護者の割合も昨年度より5%上がった。今後、人権に関する取組を通信以外にどうやって保護者に発信していくかが課題となった。

来年度、児童が友達からのサポートを実感できるようにするための「きらりカード」や、「よいこと見つけ」の取組を、より工夫しながら引き続き行っていきたい。また、問題行動や一人ひとりの悩みを早期発見するために、より細やかな児童観察を行ったり、言葉遣いに関するより細やかな指導や学級活動を行ったりするなど、全教職員で取り組んでいきたい。また、コロナ禍でも可能な、児童がやる気になる工夫した学年・学級行事を計画・実施することで、コロナ禍前よりも、より子どもたちの元気と笑顔あふれる学校にしたいと考える。

(2) 「す・き・だ山手小学校運動」の推進

「あいさつ」については、週目標への設定、教師の率先垂範、児童会や児童のボランティアを中心とする主体的な取組、地域住民の協力等、例年の取組を行った。しかし、マスク着用、大声を抑制する風潮などから、「あいさつ」の声の大きさが小さくなった児童がでてきた。そんな中、昨年度から「あいさつ」と「履物」に関する家庭取組表を作成・実施することで、一定の成果を上げることができた。アンケートでは、「あいさつ」、「履物」に関する肯定的回答の割合が、改善は見られたものの、児童・教職員と比べ保護者が低かった。これは児童の姿が、学校と家庭とで違いがあるからだと思う。

来年度、「あいさつ」については、登校班の班長への働きかけなど、学校外での生活にも焦点をあて取り組んでいきたい。「あいさつ」、「履物」の取組について、保護者への周知の徹底と、保護者のより一層の協力が必要となる。心豊かな児童の育成を図る上で、行動の目的や価値をしっかりと伝え、その必要性や重要性を児童が理解し、「学校でも家でも」実践できるようにすることが大切である。そのためにも、全職員が常に意識を高め、共通理解をして指導にあたることでさらなる成果へつながるものとする。

2 学びプロジェクト

(1) 授業改善と確かな学力の育成

「岡山型学習指導のスタンダード」を基本として、達成状況が分かりやすい「めあて」の研究、「振り返り」の工夫、自分の考えを伝え合う活動を活性化するための「発問」の工夫等により、児童が主体的に取り組む授業を目指して改善を進めてきた。「めあて」、「振り返り」に関するアンケート結果を見ると、教職員の肯定的回答が100%と非常に高く、全教職員が本年度の研究の方向性を理解し、授業改善に取り組んだことが分かる。「わたしは自分の考えや思いを、分かりやすく話したり書いたりできるようになっている」では、児童の肯定的な回答の割合が、昨年度と同様に高い結果となった。その理由は、授業中自分の考えを発表したり書いたりする時間を、意図的・計画的に設けたこと、日記や条件作文、新聞を読んだ感想を書く等の取組を全校で実施したこと、4～6年生が山手っ子タイムで文章を書いたり、文章を読解して解いたりする問題を行ったことなどが考えられる。

来年度、授業で分かったことを自分の言葉で書かせるために、「振り返り」の視点や書き方を提示していく。また、日記や条件作文、新聞を読んだ感想を書く等の取組も継続

していきたいと考える。

(2) ICT活用と特別支援教育の充実

授業におけるパソコン使用に関する情報交換を日々行うだけでなく、長期休業の研修で、プログラミング教材の紹介や、授業中有効なパソコン活用と有効でないパソコン活用を検討した。アンケート結果から見ても、児童の肯定的回答の割合が非常に高く、昨年度よりもさらに高くなった。また、各学級において特別支援教育の視点を生かした教室環境づくりや授業づくりに取り組み、各種委員会、終礼等児童の情報を共有する場を設け、共通理解の下に支援してきた。教職員へのアンケートではほとんど肯定的回答で、常に意識をして授業や支援に取り組んできたことが伺える。

来年度、ICT活用の校内研修を、全員参加型だけでなく、自由参加型の研修も行っていく。理解や指導を深める工夫をし、話し合い活動を組織化する「共有化」の取組を継続し、「分かる・できる授業」を実践していきたいと考える。

(3) 家庭学習の定着

8月に自主学習の校内研修を実施し、より質を上げるための取組・工夫等を出し合った。そして、二学期、3年以上の学年が自主学習大会を実施した。アンケート結果でも肯定的回答の割合が目標数値に達した。しかし、上の学年になるほど、肯定的回答の割合が低くなっている。これは上の学年になるほど、スポーツ少年団に所属したり習い事をしたりしている児童の割合が高くなっていることが理由の一つであると考えられるが、その対策も急務である。今後も自主学習の工夫した取組を継続し、家庭学習時間を増やしていきたい。さらに、6年生は、継続して中学校生活を見据えた工夫した取組を実施していきたいと考える。

3 元気プロジェクト

(1) 体力づくり

すべてのアンケートについて、児童、教職員とも肯定的回答の割合が非常に高い。「業間休みに外に出て体を動かしている」では、児童の肯定的な回答が、7月より14%高くなった。体育科の授業では3分間走を実施し、業間休みでは期間を決めた縄跳びを計画的に実施した。しかし、コロナ禍の影響により、業間休みのペース走の中止や、体育の授業でも多くの制約があった。来年度もコロナ禍の制約を視野に入れながら、児童のやる気につなげる取組を継続して行い、児童が楽しく、意欲的に体力づくりができるようにしたいと考える。

(2) 基本的生活習慣の定着と健康作り

メディアコントロール週間に関するアンケートでは、肯定的回答の割合が児童88%、保護者74%という結果で、昨年度より保護者の数値が2%下がった。メディアコントロール週間中の保健委員会の児童による工夫した広報活動や、担任による学級指導を実施し、総社東中学校区で共通した小学校の取組も行われているが、何年も継続して実施しているためマンネリ化し、前向きに取り組む家庭と、取組が難しい家庭との差が顕著に表れたものと考えられる。今後、メディアの利用については、学校での学級指導等で継続的に指導し、児童自らメディアコントロールできる力を育てていくと共に、家庭での一層の協力を得られるよう働きかけの工夫をしていきたいと考える。

4 地域連携プロジェクト

(1) 開かれた学校づくり

学校便りや学年便り、ホームページで教育活動の様子を発信し、保護者や地域にとって役に立つタイムリーな情報誌やホームページづくりに努めてきた。その結果、アンケートの回答では、保護者の肯定的回答が非常に多く、保護者と学校との信頼関係を構築する役割を果たしている。今後、担当者の負担を考慮しながら、記事の作り方、更新の仕方等を工夫することにより、最新の情報を定期的に届けることができるようにしていきたいと考える。

(2) 学校支援ボランティアを積極的に活用する

今年度もコロナ禍の影響で、学校支援ボランティアに依頼することが、昨年度同様、減少したにも関わらず、アンケートにおける児童・保護者の肯定的回答の割合が高かった。これは、コロナ感染症の状況を見ながら、できる限り活用するよう努力したためと考えられる。

来年度、取組ごとに新たな学校支援ボランティアの活用方法を考えていきたい。そして、ボランティアが、より意欲的に取り組むことができるよう、活動する日に校内放送で児童に伝えること、学校だより等に児童の感想や感謝の気持ちを載せることを継続していきたい。また、児童が直接ボランティアと対面し、自分の言葉で感謝の気持ちを伝えることも、コロナ感染症の状況を見ながら検討していきたい。今後も、支えてくれる地域の方々への感謝の思いや、ふるさと山手への愛着の思いが、より高まっていくよう、よりよい方法・やり方を検討・実施していくことで、ふるさとを愛する子どもの育成を図りたいと考える。

3 学校関係者評価

- 1, 心プロジェクト
 - ・児童の前向きな変容や成長を認め、紹介していく取組を評価する。
 - ・「思いやりの心」については、一定の成果があったことを評価する。
 - ・学校が児童一人一人を大切にしていることを評価する。
 - ・「あいさつ」について、「いつでも、どこでも、誰とでも」を基本と考え、「あいさつ」の意義を児童伝え、児童同士で盛り上げていく取組を考えていく必要がある。
- 2, 学びプロジェクト
 - ・「授業改善」、「基礎学力の定着」、「適切に表現できる児童の育成」は、順調に成果が出ていると思う。
 - ・「振り返り」を充実させる取組を評価し、児童に「学び」の気付きを促すため、今後も継続してほしい。
 - ・児童のパソコン使用に関して、学校側の取組が進んでいることを評価する。学年やクラスで差が出ないよう配慮してほしい。
 - ・「花丸ノート」の掲示が児童の学習意欲を高めていることを評価する。自主学習の取組等、家庭学習について、家庭格差を少しでもなくしていくよう、努力を続けてほしい。
- 3, 元気プロジェクト
 - ・コロナ禍の中、運動量を増やす取組を続けていることを評価する。
 - ・規則正しい生活習慣を身に付けるため、啓発活動を継続してほしい。
- 4, 地域連携プロジェクト
 - ・ホームページでの有効な活用方法を再考する必要があるのではと考える。
 - ・コロナ禍の中、できる限り活用するよう努力したことを評価する。
 - ・ボランティアの高齢化や、コロナ禍の状況を考え、ボランティアのあり方を再考する必要があるのではないかと考える。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- 1, 心プロジェクト
 - ・児童が友達からのサポートを実感できるようにするために、「きらりカード」の取組、帰りの会での「よいこと見つけ」の取組、「なかよしの虹」の取組、人権に関する道徳の授業や学級活動をより工夫しながら引き続き行っていく。
 - ・「あいさつ」を最重要課題として、児童会活動や学級活動等で取り組み、6年生や家庭への呼びかけや「あいさつ週間」を設けることなど、校内外を問わず取り組んでいく。
 - ・工夫した取組や教職員の働きかけにより、コロナ禍前よりも、より児童の元気と笑顔がふれる学校を目指す。
- 2, 学びプロジェクト
 - ・引き続き「振り返り」の書き方や視点を研究し、実践していく。
 - ・授業中、聞く側の反応に気を配り、条件を付けての話し合い、選択肢を与えての話し合い等を行っていく。
 - ・児童に日記や作文、新聞を読んで感想を書くこと、行事の作文等を授業や家庭学習で行い、「書く力」を育てていく。
 - ・教員がパソコンを使用する場面を示すだけでなく、児童が使用する場面を選ぶ授業を増やしていく。また、教員一人一人が参加の有無を選択できるミニ校内研修を定期的に実施し、全教員のスキルを上げていく。
 - ・自主学習の質を上げるために、学年・学校で統一した取組や工夫した取組は継続して実施する。
- 3, 元気プロジェクト
 - ・コロナ感染症の状況も考慮に入れながら、児童のやる気につなげるいろいろな工夫を考え、実践していく。
 - ・総社東中学校区で、幼小中連携による減メディアの取組を、改善しながら継続して行っていく。
- 4, 地域連携プロジェクト
 - ・学校支援ボランティアと児童の交流を、コロナ感染症の状況も考慮に入れ、新たな活用方法も探りながら行っていく。